大宰府アカデミー・令和編　第2講　令和 5 年 5 月 17 日（水）質問及び回答（Q＆A）

「大宰府成立への道程～那津官家・筑紫大宰・筑紫総領～」
講師・回答：熊谷　公男氏（東北学院大学名誉教授）

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

①　Q/　倭国の「任那復興」政策について

任那滅亡後、倭国の対外政策の柱が「任那復興」となった理由は何でしょうか。それはのちに新羅からの「任那の調」の貢納へと変化していきますが、倭国がこれらを執拗に求めたのは何故でしょうか。また「任那の調」とは、具体的には何でしょうか。例えば鉄資源などでしょうか。

A/　回答

かつて”大和朝廷による任那の植民地支配”説が事実と考えられていた時期には、その植民地であった任那が失われたのですから、倭国が「任那復興」を対外政策の柱とするのは当然のこととされていました。しかし、講座でも述べましたように、その植民地支配説が崩壊した現在では別の説明が必要です。

この倭国の「任那復興」あるいは「任那の調」貢納へのこだわり・執着について、わたくしは、5世紀前半の倭国と「任那」地域との緊密な関係にその原点があると考えています。この時期に「任那」地域からの渡来人がさまざまな先進的な文物をもたらし、当時の王権の強化や社会の技術革新をもたらしたのでした。こうしたことを通じて、「任那」地域に対する特別な思いの基礎が形づくられたのもこの時期であったと思います。列島に住まう人びとにとっても、また倭王権にとっても「任那」はかけがえのない存在であったことが、「任那復興」また「任那の調」へのこだわりに表れているものと考えています。

その「任那の調」が具体的に何をさすかは、史料が残っていないためわかりません。鉄資源とする説もありますが、わたくしはむしろ、それは倭国へのミツキとして象徴的な意味をもつものであったと考えますが、それが何であったかは不明というほかはありません。

② Q/ 白村江敗戦後の山城築城について

山城はなぜ瀬戸内海にまで築城されているのでしょうか。また、その中の長門国の城はどこに比定できるでしょうか。

A/ 回答

瀬戸内海にも山城が築城されたことについては、やはりヤマトまでの敵襲を想定したためであろうと思われます。また、長門国の城については、下関付近を中心にいくつかの候補地があるようですが、まだ遺跡は見つかっていません。

③ Q/ 筑紫総領について

筑紫総領は官職名でしょうか。あるいは組織（統治機構）名でしょうか。

A/ 回答

これについては、講座でも述べましたが、わたくしは、少なくとも『日本書紀』の白村江戦以後にみえる「筑紫大宰」については、「筑紫総領」を書き換えたものだと考えます。そのうえで、この「筑紫総領」の記事をみていきますと、『続日本紀』文武 4 年に石上麻呂を「筑紫総領」に任命した（講座資料レジュメ 5 頁）、とありますから、「筑紫総領」は官職名と考えられます。

一方で、「筑紫総領」を中核とする組織が何と呼ばれたかはよくわかりませんが、講座の中で参考文献として挙げた坂上康俊さんは、講座資料レジュメ 5 頁③周防の天武 14 年 11 月に「周芳総令所」がみえることから、「筑紫総領所」であった可能性を示されています。

※ ご質問ありがとうございました。